

## 「平庭の麓から」

文責：久慈市立山形小学校 校長 角谷 隆章

学校＋保護者＋地域＝子どもの健やかな成長

「学び高め合う子」、「心豊かな子」、

「強くたくましい子」の育成をめざし

### 【学習発表会の感想を読んで】

学習発表会後にいただいた感想用紙を一通り、読ませていただきました。

「子どもたちの成長を感じた」、「子どもたちの演技をみて、感動し、涙が出た」、「予行でも観客を入れるなど、しっかりとした感染対策が講じられていた」など、総じて“素晴らしい学習発表会であった”という感想がとても多く、私としても、改めて、開催できたことを本当にうれしく思いました。ありがとうございました。

寄せられたご意見の中に「全校合唱はステージでやってもよかったのでは？」というものが数件ありました。学年発表の際、マスクをとっているのだから、ステージ上でも歌えるのではないかという主旨のご意見かと思えます。合唱について、今回このような判断をしたのは、「全校児童64人がステージ上に一齐に並ぶと、それ自体で“密”が生じる。そこでマスクを取って、歌うということは、感染リスクを伴うことになる」ということからです。岩手県や久慈地域の感染者は激減しているの、できないことはないという考えもあると思いますが、まだ油断してはいけない現状でしたので、こう判断させていただいた次第です。このほかにも頂いた意見は、今後の参考にさせていただきます。

学校としては、コロナの現状をしっかりと把握し、“もしかしたら”という視点を決して忘れることなく、感染予防に最善を尽くし、教育活動を進めて参りますので、ご理解・ご協力の程、よろしく願いいたします。感想の中に「来年は全てがコロナ流行の前に戻ったような学習発表会になってほしいと祈っています」という一文がありました。ほとんどの方が、同じ気持ちを持っていると思います。そのような世の中になることを期待しましょう。

さて、今回は、保護者の方々に、もう一つ、私から伝えたいことがあります。感想には、「先生方、お疲れ様でした。ありがとうございました」、「先生方のご指導に感謝いたします」、「これからもご指導、よろしく願います」など、我々教職員の取組に対する労いのことばがすごくたくさん書かれていました。なかには、特定の先生の名前をあげている方もいました。

私たちは、これが仕事です。ステージ上で、子どもたちが輝くために、指導をするのは、当たり前のことです。しかし、このような言葉をいただくと、純粋に『すごく嬉しい』。褒められて、嫌な気持ちになる人はいません。いくら仕事とはいえ、一生懸命頑張ってきたことに対して、これだけたくさんの保護者の方々に認めもらえるというのは嬉しいものです。そして、この嬉しさは、次への活力につながります。特に、本校には、20代、30代の若手の先生が多くいます。皆さんが想像する以上に、喜びを感じ、次への大きな活力につながっていることでしょう。

私は、これまで多くの中学校を渡り歩いてきました。中学校では文化祭があり、同じような感想を保護者に書いてもらうことがあります。もちろん、労いの言葉を書いてくる方もいますが、こんなに多くの方に書いていただいたのは、はじめてです。それが嬉しいし、ありがたいのです。小学校と中学校の違いでしょうか？ 私は違うと思います。山形小学校の保護者の方々だからこそ、書いてくださっているのだと思います。そうでなければ、毎年、子どもたち一人ひとりが輝く学習発表会はできません。前号に書きましたが、学校（担任）と保護者が、子どもの成長を第一に考え、しっかりと手を取り合い、連携していくことで、子どもの心は安定し、さらなる成長が期待できるというものです。これからもどうぞよろしくお願いいたします。

### 【保護者と学校のより良い関係】

少し前に買って読んだ本『いい教師の条件』（諸富祥彦著 SB新書）の第4章「保護者と学校のより良い関係」に、書かれてあることを一部抜粋して紹介します。今回私が触れたことと関係するところもあります。今後、中学校、高校へ進学するお子さんを持つ保護者にとって、読んでおいても損はしない本かと思えます。

以下、一部抜粋して紹介します。

#### ◇「消費者目線」で見られる学校と教師◇

現在の保護者の方々が小中学生だった頃は、親が子どもを学校に預けたら、あとは先生にお任せするというスタンスでいるのが当たり前だったのではないのでしょうか。親と学校の関係に変化が見られ始めたのは90年代以降、「学校教育は教育サービス」という意識が浸透してからです。そのきっかけの一つは、文科省が教育行政についての表現で「サービス」という言葉を用い始めたことだと私は思います。その頃から、保護者の中にも「教育もサービスなのだから不満があれば文句を言うのが当たり前」という風潮が広がり、教師の権威は徐々に失われていきました。とはいえ、保護者が学校や教師に対して意見することのすべてが悪いというわけではありません。中には「子どもを人質にとられてますから」と内申書を意識するあまり、何も言わないという保護者の方もいらっしゃるかもしれません。けれども、それは子どもにとっても、教師にとっても良い結果をもたらしません。気がかりなことはきちんと学校に伝えるべきです。大切なはその“伝え方”です。親にとって大事なのは、学校・教師とのやりとりの結果、「子どもにとって良い結果、メリットが返ってくる」ということです。そのためには正面を切って学校・先生とぶつかることが得策であるとはいえません。子どものためを思うなら、「子どもを教育するパートナー」として教師や学校とつき合っていくことが大切なのです。～以下省略～

#### ◇デビュー初日から教師としての「完成品」が求められる時代◇

もちろん、保護者との関係を円滑に築けるベテランの先生もいます。しかし、最近は経験が浅い20代の若手教師が急増しています。かつてならば、「まだ若い先生だから」と保護者が若手教師の成長を見守り、育てようという余裕がありました。しかし、現在の保護者にその余裕はありません。教師に対する要求水準が高まり、たとえデビューしたばかりの20代の教師に対しても、教師としての「完成品」が求められるようになったのです。よく見られるのが、保護者がついつい若い先生に厳しく接してしまうケースです。無理もありません。いま、小学生の保護者の中心世代は40代です。40代の人間からみたら20代はどうしてもまだまだ未熟者に思えてしまいます。「大人」と「若者」の関係なのです。若い先生は先生で「若い」「経験が浅い」ことを引け目に感じ、保護者からの言葉を真正面から受け止め、傷ついてしまいます。その結果、先生の意欲が削がれ、ひいては子どもへの接し方や授業のレベルが低下することもあります。必要なのは、先生への「勇気づけ」や「励まし」です。保護者の方々には、ぜひ先生への信頼と期待をベースにしたかわり度、ゆとりをもって接していただければと思います。

書きながら、私自身、20代の駆け出しの頃を思い出していました。教育実習でたかが数時間、授業をただけなのに、仕事として授業をすることになったときの緊張感と責任感。分掌の仕事、部活動……。

無我夢中でしたが、保護者の方々からかけていただいた一言、「いや～、先生、子どもが世話になっています。毎日楽しいって学校に行っているよ」、「子どもが“おもしろいクラスだ”って話しているよ。ありがとう」、「先生の書く学級通信、いつも楽しみにしています」等々は大きな励みになりました。

こんなこともありました。PTAの学級役員を決める際、「ちょっと、角谷先生は、早く部活動に行ってもらうんだから、1組の役員、時間かけないで、早く決めてよ!」と、他クラスの野球部の子どもをもつ母親が私のクラスの保護者に“はっば”をかけ、笑いながら「わかっていますよ」と応えている。保護者同士の横のつながりも、駆け出しの頃は勇気を与えてくれたものです。

例のごとく、話題が若干逸れて、私の思い出話まで書いてしまいました。すみません。でも、今、私は山形小学校に勤務していることをうれしく思うと同時に、誇りに感じています。

最後に、ご案内させていただいた、**明日の授業参観、子育て講座**も、どうぞよろしく願いいたします。